日本行動計量学会会報
第12号
1977年6月13日
日本行動計量学会
運営委員会広報係
(〒106) 東京都港区
南麻布4−6−7
統計数理研究所内

インドにおける行動計量学

柳井晴夫

本年一月下旬から四月上旬までの約二ケ月半、インドのニューデリーにある統計研究所に滞在する機会を得た。統計研究所の本部は、一九四〇年にマハラノビスによってカルカッタに創設されたもので、周知のように、インドはこれまで多くの傑出した世界的統計学者を生み出している。

ところで、カルカッタやニューデリーにある研究所には、いわゆる統計の理論家ばかりでなく、社会科学（経済学、言語学、心理学、社会学、人口学）や生物学・医学の専門家が各セクションにわかれて配置されており、それぞれの分野における計量的問題に取り組んでいる。その数の比率からいえば、後者の占める割合がはるかに高いことから、研究所内には、統計研究所という名称を返上した方がよいのではないか、という意見もあるくらいである。

このように、現在のインドにおいては、多くの科学における計量的手法の必要性が強く認識されており、昨年の十二月には、南部のバンガローという市で、計量的手法の導入が最も遅れている分野という副題付きで「教育学・公衆衛生学のデータ解析に関するシンポジウム」が開催され、多くの研究者が参加している。このようなインドにおける動きは、まさにわが国における行動計量学会の歩みと軌を一にしているように思われるが、ある意味ではインドの第二次五ケ年計画の政府案作成に実質的に貢献したマハラノビスの統計に対する考え方を踏襲しているものともいえよう。マハラノビスの第一弟子で、現在の世界の統計学会の指導的立場にあるとみられるC・R・ラオは統計理論だけではなく、人類学、考古学、生物学、医学、計量経済の分野でも、優れた業績をあげており、統計学がさまざまな学問領域に果たす役割を高く評価している。昨年十一月のISO（日本の総理府統計局のような組織）の二十五周年記念講演において、ラオは「インドのようなGNPの低い国では与えられた資源をすこしでも有効に使うことが必要であり、その意味では〝統計学〟は一つの国家的資源である」と述べているのは注目に値しよう。（インドでは品質管理の研究も盛んである）

しかし、インドにおいても大学の数学科からはいわゆる理論統計学者しか育成されず、他の学科からは統計理論のわからない統計のユーザーしか生まれないという、わが国と共通の悩みがあるが、統計研究所（大学院生の教育を行なう）によって、このギャップが埋め合わされているといえよう。

行動計量学会も、あと二ケ月で設立五年目を迎えようとしている。本学会の設立は、インドの例からも明らかなように世界的な趨勢に沿うものであるから、これまでのように単に多くの学会の寄せ集め的存在ではなく、既成の学会の壁を打ち破ったスケールの大きい研究組織が生まれていくことを期待したい。（日本行動計量学会理事・千葉大学人文学部助教授）

学会費納入のお願い

本年度の学会費（正会員は三千円、準会員は二千円）を未納の方は、至急、事務局あてご納入下さい。送金は振替（振替番号　東京八−一四八〇五六、日本行動計量学会）をご利用下さい。先年度会費を滞納している方もよろしくお願いします。長期間会費未納の場合は学会を退会したものとみなされますので、ご注意下さい。

次期役員（理事・監事）選挙について
—選挙管理委員会より—

次期の役員（理事・監事）選挙を次の要領で行います。

1. 選挙人および被選挙人は、五十二年五月十五日現在の正会員七二五名。
2. ハガキによる無記名投票で理事五名連記、監事二名連記とする。（投票用ハガキは、1.に該当する正会員にのみ、お送りします。）
3. 投票締切り日は七月二日（当日消印有効）

詳細は投票用ハガキと共にお送りした選挙要領をご覧ください。

新役員は、九月の総会を経て、現役員に代り、会務を担当することになります。棄権のないよう早目にご投票をお願いします。

紹介

医学統計集談会について

豊川　裕之

昭和50年7月から、医学統計集談会が、東大病院管理棟・電算機課の集会室で、毎月2回（隔週火曜日）の夕方、6時から9時まで開催されている。

最初11回にわたって、フラス著佐久間訳の「計数データの統計学」の輪読をして、次いで、経口糖尿病剤の血管障害で有名になったUGDP（The University Group Diabetes Program）の暫新な統計手法について、アメリカでその作業に参加した富永祐民君（愛知がんセンター）に解説していただいたのを皮切りに、問題中心、方法論中心のテーマをもちよって論談し合っている。

参加者は平均15名ぐらいであって、遠い職場からも参加してもらっている。統計屋の立場や臨床屋や疫学屋の各立場からの意見が自由に、気楽にたたかわされるので、出席者数は当初心配されていたほどに減ることもなく、続いている。

また集談会を持つに至った当初の意図は臨床医が抱えている統計処理上の難問題を持ち込んで「医療と統計を和解させよう」という家庭裁判所の調停委員会のような場を設定することであった。その他にも、ざっくばらんに談話できるような場の設定も意図されていたが、今のところそれらはほぼ成功しているといえよう。

当面この集談会は続くと思うものの、もう少し何とかしようと、ここで取り上げられたテーマの中で適当なものを雑誌に掲載することを模索している。行動計量学会誌のように固いところではなく、と考えているが、本学会誌を集談会レベルにまで引きおろすことの方が意味あることかも知れない。その点の御教示を仰ぎたいと思っている。

なお、本会の出席者はほとんどが行動計量学会員でもあるので、「研究会」としての申し出はしていないけれども実質的にはその扱いを受けたいと思い、ここに本集談会を紹介する次第です。お問合せは　開原成允（03—八一五—五四一一、内線八一二六）または豊川裕之（03—八一二—二一一一内線七七一七）までお寄せください。

皆様の御参加をお待ちします。

（日本行動計量学会会員、東大医）

学会だより

。科学基礎論学会総会および講演会（昭和五十二年度）六月十七～十八日　大阪市立大学田中記念館

なお、十八日（午後一時半～五時）には、次のシンポジウムが開かれます。

「テーマ」行動決定の問題

（司会）林知己夫、（試行錯誤）岩坪秀一、（医学）井上通敏、（裁判）宮原守男、（経営）江藤肇、（政策）吉村融、（数理モデル）松原望

T・W・アンダーソン教授来日、各地で講演会

多変量解析や時系列解析で著名な統計学者T・W・アンダーソン教授が、このほど来日、次の講演会が予定されています。

・六月十五日（一時半）統数研
・十七日（四時）慶大工・二十二日、北大理・二十七日（二時）東工大・二十八日（一時）東大・七月五日（三時）阪大基礎工・七日（十一時）広大理・九日、九大（未定）・十一日（一時）統計学会（於福岡大）

なお講演時間など多少変更されることがあります。

詳細は東工大（電〇三—七二六—一一一一）の藤井光昭氏（内三二一〇・三二一五）まで、お問合わせください。

会議議事録要旨

◇理事会（四月二十七日）
於　統計数理研究所
出席者　理事　九名

1. 刊行物企画委員会から、行動計量学シリーズ（仮称）として現在までに方法論と対象領域の両面にわたり次の内容と執筆者を選定したむねの報告があり、これを承認した。
「比較（林知己夫）」、「距離（高根芳雄）」、「データ（水野欽司）」、「公害問題における行動計量（山本俊一）」、「対人関係の計量（丸山久美子）」
なお、このほか「法律」、「政治・政策」、「文明」などについて立案中である。出版は3年後を目標にするが、部分的に完成した分を講座ものとして雑誌に連載する予定。
2. 欧文誌編集委員長の印東理事が渡米するため、同委員長の残任期間中、編集委員の松原望氏（筑波大・社会工学）を委員長代理とする。
3. 次期の理事・監事の選挙を、正会員への告知・投票用紙の発送（6月）―投票〆切り・開票（7月）の日程で実施する。
投票はハガキによる無記名投票で理事については五名連記、監事については二名連記とする。
理事の選出は先回通りとし、得票数の上位十五名を選び、次いで選挙結果と専攻分野を考慮して別に選ぶ人数を加えた計三十名を次期理事として、総会に提案する。
監事の選出は得票数の多い順に上位2名とする、理事と監事の両方に該当する場合は理事を優先し、監事の選出から除外し三位以下を繰上げる。
選挙管理委員は、飽戸理事、江川清（国語研）、水野欽司（統数研）の三氏とする。
4. 本年度の「総会」は岡山大学で開催される第五回総会の会期第一日（九月一日）の午後に行う。
5. 五十一年度決算については未刊行の行動計量学4巻2号関係の支出を加えて最終報告とし、五十二年度予算案については事務局で検討の上、次回理事会で審議し総会にはかる。
6. 学会運営は、特定の会員に業務負担が集中しないよう分散を図り、会員相互の活発な交流を促す方向で今後とも努力する。
7. 各種委員会報告（運営委員会・和文誌編集委員会）

◇運営委員会（四月十一日）
於　統計数理研究所
出席者　運営委員　九名

1. 第十六回月例シンポジウムは五月二十八日に井関利明氏（慶応大・文）をオーガナイザーとし、総合テーマを「マーケット・セグメンテーションと経営戦略」として行う。
2. 第十七回はSMCと共催で六月に実施する。このほか「相関」をテーマとする月例シンポジウムは、オーガナイザーを竹内啓氏（東大・経済）とし柳井理事が準備に当たる。
3. 第七回講演会「多変量解析の理論と応用」は第五回と同じテキストにより六月一日から三日間、電気工業会講堂で行う。参加費は第五回と同額とする。
4. 秋の第八回講習会は担当委員がテーマ・企画等を整え九月に選ばれる次期委員に引き継ぐ。
5. 広報に関し会報のあり方の検討を含めて西川委員が担当する。

第十七回月例シンポジウム開催

〝学習のメカニズムと理論〟

SMCと共催で講演とパネルディスカッションの会を行います。

（日時）七月二日（土）午後一時
（会場）専修大神田校舎二〇六室
司会は大泉充郎氏（電通大）、講演者兼パネラーは渡辺慧氏（ハワイ大）、榎本肇氏（東工大）、小野茂氏（広島大）です。多数の方のご来聴をお願いします。

事務局から

◎既刊の学会誌の購入を希望する方は、振替（1ページ左下参照）を利用して、希望する巻・号名を記入の上、雑誌の代金と郵送料をご送金ください。雑誌の値段と郵送料は次の通りです。

◇行動計量学1巻1号（八百円）
2巻1号（七百円）2巻2号（七百円）3巻1号（一千円）3巻2号（一千円）4巻1号（一千五百円）

◇Behaviormetrika №1, №2, №3　（いずれも二千円）

◇郵送料　一冊（二百円）三冊まで（三百円）五冊まで（六百円）

◎なお行動計量学4巻2号は現在印刷中で発行が遅れています。

研究会だより

データ解析と統計数理

会報第三号（昭和四十九年六月）に四つのサブグループ研究会が産声をあげたとある。当研究会もその一つで、情報理論、データの変動・多変量解析を三つの柱として統計数理の立場から現象解析に役立つ理論・方法の開発を目標にかかげた。開催ペースは緩急自在であったが、参加者の熱意により現在まで十一回の会合を重ねることができた。最近御無沙汰続きで、怠慢という汚名を返上すべく世話人が十二回目（六月予定）開催をめざして準備中である。

参加者は毎回ほぼ十人前後で、土曜の昼下がりの三時間たっぷりを二つの発表にあてている。討論は相当活発で、五時過ぎに終るとぐったりすることも多い。誰もが遠慮なく自由に意見を交換できるような雰囲気作りをモットーにしている。発表内容は、多変量解析的な方法論の理論的な問題が多く、適用例報告がそれに次いでいる。論文紹介、サーベイなど勉強会を兼ねたこともあった。これまでの発表題目を列挙してみよう。

デンドログラムの一つの指標・Roach のクラスター分析の最適算法の紹介・射影子の多変量解析への応用・エントロピー空間の代数的構造・情報量の定義に関する展望・三次相関係数について・AICの原理と応用・確率的MDSの現状・部分空間法 ― 文字図形を自動分類するための一手法・判別分析と重回帰分析における変数選択・最適層別の方法・ある種の固有値問題における固有値の評価・NTAP（数値的地域区分法）について・Indicator method of MDS・周辺固有ベクトルによる図形の表現・線形および非線形判別分析・標本判別関数と母判別関数・ベイズ線形モデルの応用・情報、確率、価値・類似性判断における Additive difference model・Parameter estimation in the individual differences model in additivity（以上二十一件）。

学会から活動のための補助費もいただいた。今後ますます活発な研究会にしていきたいと参加者一同考えている。新たに参加を希望される方は（03）581－0441 ext 443 岩坪まで連絡していただきたい。おおいに歓迎いたします。（電子技術総合研究所・岩坪秀一）

会員の声

「励ましのお便り」

富田　隆

「会費の無駄使いだ」と言われたことがある。このスノッブな学友に言わせれば「自分で発表もせず、論文も出さない学会に毎年ダラダラと会費を払い込むのは、愚の骨頂」ということになる。彼の忠告が僕の不勉強をしかるためのものであるなら、しかりごもっとも、と頭を下げよう。入会以来、一度も発表をせず今日に至ったのは、本当にお恥かしい。「しかし、まてよ」と僕の内なる「居直りデモン」がここで頭を持ち上げるのである。学会は発表や業績獲得のための場なのであろうか。それが重要な一機能であるにしても、それだけなのだろうか。

「学ぶ場」としての学会の機能が今日あまりにも軽視されてはいないだろうか。各学問領域が細分化専門化された現代では、ある分野でのエキスパートやその道の権威も、他の領域では素人や初学者に等しいと言えよう。その一方で、自分の専門以外の広い領域への知的好奇心や関心がある種の学問的行き詰まりからの脱出口であることも事実であろう。つまり、「学べる場」として、学会が存在するのだ。この「有り難さ」は、今回、学会主催の講演会（多変量解析の理論と応用）に出席して、つくづく感じたものである。

学ぶ、などと、いい若い者が道学者面をして、と思われそうであるが、僕は何も心構えや教訓を論じようというのではない。ディメンツのきた老人よろしく悲憤慷慨しようというのでもない。むしろ、この学会がめずらしくも持っている独特な啓発的雰囲気に愛情告白をしたのであり、おそらくはある種の寛容さと若さに支えられているこうした美点を今後共育ててゆくための「励ましのお便り」をしたためたのに他ならない。

最後にこう書いたからといって、発表や投稿を慎重にとか聞き役も大切、などと言うつもりは無いことをお断りしよう。なにせ、発表してたたかれるほど良い勉強はまず無いのですから。（日本行動計量学会会員、白百合女子大）

編集後記

短かいほど喜ばしいことの一つに後書きの長さをあげたい。大勢の方々からの原稿にお礼申し上げる。紙面は皆様の手で。（西川記）